
あたしのストーカーは極上の美青年！？

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしのストーカーは極上の美青年！？

【Nコード】

N9119I

【作者名】

桐龍朱音

【あらすじ】

無類の美形好きであることを除けば、何処にでもいるいたって普通の女の子が極上の美青年にストーカーされたところから始まるヘンテコなラブコメです

誰か夢だと言ってッ！

『趣味は何？』

もし誰かにそう聞かれたなら、あたしは瞬時にこう答えるだろう。

「美形観察ですッ！！！」と――。

そう、あたしは自他共に認める無類の美形好き。

美しい人を見ると、男だろうが女だろうがときめかずにはいられない。

でもそれは恋愛感情とはまた別モノのときめき。

言うなればそう、「憧れる」という感情に近いもの。

だからあくまでもあたしの美形好きは「趣味」レベルでおさまっていると思っていた。

…今日、こんな夢（あるいは幻覚）を見るまでは。

* *
* *
* *
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「あの、本当にごめんなさいっ！」

…美形好き過ぎてあたしの頭はとうとうおかしくなってしまったようです。

まさかこんな痛い夢…あるいは幻覚を見るなんて思いもしなかったよ、ほんと。

これじゃあ、もうヘンタイレベルだよ。
ちよつと反省。

「いけないことだとは思ってたんですけど、止められなくて…」

さつきからしきりにあたしに向かって謝罪の言葉を述べているのは、
今まで見てきた美形さんたちの中でも群を抜いた美しさを誇る美青
年。

年はあたしと同じくらいか少し下くらい。

服装と声からして男だと判断したんだけど、女といっても通用する
くらい綺麗な顔立ちをしてる。

「本当に、本当にごめんなさいッ!」

ふわふわと春風になびく柔らかそうな茶色い髪。

その髪と同じ色の大きな瞳。

何度も謝罪の言葉をこぼす、薄桃色の愛らしい唇。

まるで芸術品のようだね、美青年よッ!

何もかもが完璧に整ってるよ!

——でも、夢や幻覚にしてはやけにリアル…

夢や幻覚って、もっとこう…ぼんやりしてるもんじゃないのかな?
ここまでリアルだと逆に自分の想像力に感服しちゃうよ。

あたしってば、いつの間にこんな想像力を養ってたんだろう?

そこまで美形好きが進行しているとは思ってもよらなかったなあ…。

「…あの？」

なかなか言葉を返さないあたしを不思議に思ったのか、恐る恐るといった表情でこちらを伺う美青年。

うーん、本当にリアルだな、オイ。

その美しさはちょっと浮世離れしてて人形っぽい感じがするけど、仕草や表情はそこらへんにいる人達と大して変わらないし。

ほんと、あたしの想像力すげえな。

もう「匠」の領域って感じ？

—— はっ！！ いかんいかんッ！！

今のあたしはこんな素晴らしくも痛い夢（あるいは幻覚）を見ている場合じゃなかった！

夢でも幻覚でもとにかくこの状況から早く目覚めなければ。

現実のあたしは確かものすごく大事な場面に直面していたんだから。

—— けっこう興奮してたから、意識飛んじやったのかもなー。

そうそう。

現実のあたしは重大事件に直面してたんだよね。

だからこんな夢（あるいは幻覚）を見てる場合じゃないっての。

早く目覚めないとあの野郎を逃がしちゃうじゃないの…。

——…でも、夢ってどうやってたら覚めるんだろ？

夢が現実か判断するにはよく頬をつねってみればいいと言う。
けど夢から覚める方法なんて聞いたこともない。

——うーん、仕方ない…とりあえず頬をつねってみるか…？

とにかく何かしないと。

そろそろ自分の想像力の逞しさに恐ろしさを感じてきちゃってるし
ね…。

よし！

そうと決まれば、せーのッ！

「痛いッ！…！」

ああ、勢いよくつねり過ぎたッ！…！

マジで痛いよ、これえ！

自分でやったくせにちよつと泣きそうなんですけど…。

——いやいや、でも痛いってことはやっと現実に戻ってこれたと

いうことで…

「大丈夫ですか？」

甘やかな声に顔を上げれば視界に広がる極上の美青年。

麗しい顔に憂いを浮かべ、心配そうにあたしの顔を覗き込んでいる。
…しかもかなりの至近距離で…！！

「ぬわあああああッ!？」

「あ、危ない！」

ゴーンッ!という轟音が辺りにもあたしの頭の中にも響き渡る。

次いで頭を襲った鈍い痛みに思わず蹲る。

頬のをつねった時よりも何十倍もの痛さが頭を駆け巡る。

どうらや、驚きのあまり後ずさったことで背後にあった電柱に思い
つきり頭をぶつけたらしい。

——痛いッッ!!痛すぎるッ!!でも痛いってことは現実なの
に何で…

「大丈夫ですか!？」

何でこの美青年は消えてくれないのッ!?

おかしい!

おかしすぎるよ!!

「あ…あなた夢じゃないの?」

「は?」

困惑気味の表情さえ麗しい美青年。

ああ、やっぱり美形って素晴らしいッ!

どんな表情も仕草も素敵に見えちゃうんだから…

——ッて、そんなこと思ってる場合じゃない!!!

これが現実だとしたらよ?

この美青年も現実?

いやいや、でもねッ!

現実のあたしは確かここ数カ月この辺をうろついていた妹のストーリーを追いかけていたはずなんですよ!?

しかもどうにかこうにそのストーリーを追いつめて「さあ、その顔を見せなさい!」何て言ってたところなんですよ!?

そしたらそのストーリーの顔がこの美青年になって…。

現実的に考えて美形がストーリーなんてしないでしょう?

だからあたしはストーカーが極上の美形という痛い夢を見ているものだとばかり…。

「まっ、まさかあなたがストーカー？」

「はい。ここ数カ月あなたを追回したのは僕です」

「でえええええええッ!？」

妹のストーカーだと思ってたら実はあたしのストーカー。
しかもそのストーカーは極上の美青年でした

……そんな非現実的なこと、誰だって夢か幻覚だと思うでしょ？

誰か夢だと言ってッ！！（後書き）

本格的連載は春以降となる予定です。

美形の微笑みは鼻血もの

「あの、えっと、その、うおおぅ…！」

妹のストーカーだと思っていたのが実はあたしのストーカーで。
しかもそのストーカーは信じられないほどの美青年で。

ストーカーは美青年。
美青年はストーカー。

あまりに非現実的な今の状況に、あたしの思考回路はショート寸前。
日本語すらともに喋れないほど脳内パニックでありますですよ！
う！

「あの、大丈夫ですか？」

「ほぎゃッ！？」

びっ、びびびびび美青年よ！
顔が近いッ！

そんなに綺麗な顔を近づけられちゃうと鼻血出そうなんですけど
おおお…っ！

「さっきより顔が赤くなってるみたいですけど……」

だからそれはあなたのせいなんですう！
うああほんとそれ以上近づかないでえええ！
は、はな、鼻血が出ちゃうからあああ！

「もしかしてさっき頭打ったせいでどこか具合が悪くなっちゃったんですか！？」

むしろそうなってくれてたほうがどれだけ良かったことか……！
いくらなんでも男の人（しかもすごい美青年）の目の前で鼻血ブー
はやバイでしょ……！！
そんなことになったらもう女としてこの先生きていく自信失くすわ
！！

お願いだから誰か助けてヘルプミー！！！！！！

「透てちゃんっ！」

不意に背後から鈴を転がしたような可愛い声があたしの名を呼ぶ。

その声を聞いた瞬間、あたしは泣きそうになった。
待ち望んだ救いの手！！！！

それはあたしの双子の妹だった。

「明^{あき}ぢゃあ あ あ あ あ あん!!」

振り向いて可愛らしい声の主の名を呼ぶ。

鼻血を噴出さないように鼻を押さえているせいで微妙に鼻声になっ
てしまった。

自分の声ながらちよつと気持ち悪い…。

でも今はそんなの気にしてる場合じゃない!

このわけわからん状況（及び鼻血ブーの危機）から一刻も早く逃げ
出したいんだ!

「助^{すけ}いでー!!!」

鼻を押さえたままあたしは全力で明ちゃんのもとへと駆け寄る。

あたしより背が高い明ちゃんの背中に隠れながら今の自分の状況を
切実に訴えた。

「ズドーガーが美青年で美青年がズドーガーで頭バニッグで顔が綺麗すぎて鼻血ブーになりそうで女どじでできればヤバイけどもうどうじだいいのがわがらなくて」

「ごめん、透ちゃん。よくわかんない」

「えゝ！？だがらね！」

「うん、とりあえず鼻から手を離そうか。それともう少し落ち着いて」

明ちゃんの冷静な声に促され、あたしはようやく鼻から手を離れた。そして「はい、息吸ってー。はい、今度は吐いてー」というこれまた明ちゃんの冷静な声に促され深呼吸をし、いくらか落ち着きを取り戻した。

……よし、鼻血ブーの危険はなんとか回避された。

「落ち着いた？」

「うん、なんとか……」

あたしは今にも垂れそうな鼻血を押さえ込むためにあたふたしていたけど、ふと二人の会話に疑問を持って動きを止めた。

「え…………ぶだりとも知り合いなの？」

また一瞬の沈黙の後、明ちゃんはあたしの方を見ないで美青年を見たまま小さな溜息をひとつついた。
そして思わぬ爆弾発言を投下した。

「透ちゃん、彼はねあたしの事務所の後輩」

「事務所……………っでまざがっ!!」

「そう。彼、これからデビューする新人モデル。あたしのお仕事仲間」

「ええええええええ!!?」

驚愕するあたしに美青年はさっきよりも威力を増した天使の微笑で笑いかける。

その微笑の美しさと、『ストーカーは美青年でしかもこれからデビューする新人モデル』なんていう事実には鼻を押さえていた手から力が抜けた。

どろり、とした赤い液体が間抜けな顔をしているあたしの鼻から垂れ落ちた。

美形の微笑みは鼻血もの（後書き）

一年も放置していてほんとに申し訳ありません……………；
これからはちょこちょここと更新していきます。
呆れずにお付き合いいただけると嬉しいです。

本当にすいません！！

何だかんだで辿り着いた透の見解（前書き）

ちよこつと説明＋現在↓ちよい過去↓現在って感じの流れです。

何だかんだで辿り着いた透の見解

あたしこと神宮透じんぐうとおるには、明ちゃんあかりという双子の妹がいる。

双子と言っても二卵性双生児なので外見はまったく言っていないほど似ていない。

そのため明ちゃんは大手の芸能事務所『GLORIOUS』でモデル兼女優として活躍し、そこで一番の稼ぎ頭と言われるほどの美貌と魅力を持つているにも関わらず、あたしは何処にでもいるような平々凡々な23歳の社会人。

あ、ちなみにお仕事は明ちゃんのマネージャーをしております。

二卵性とは言え、双子なのにこうも妹との格差があると周りの人にはよく比較されたりもしてきた。

でも、あたしは特に気にしたことがない。

だって、明ちゃんがすごいことも、そのすごさを鼻にかけず一生懸命努力していることも、ずっと傍で育ってきたあたしが一番よく知っている。

それに明ちゃんはあたしにとっても優しい。

美人で性格も良い妹を可愛がりこそすれ僻むなんてことはあたしにはできない。

てゆーか、美形好きのあたしにとっては明ちゃんはもう極上の妹なのですよー！！

目に入れても痛くないくらい明ちゃん大好きなあたしは、立派なシスコンだと胸を張って言える。

「透ちゃん、鼻血出てるよ。拭いてあげる」

そう言ってハンカチであたしの鼻を拭ってくれる明ちゃんはほんといい子だ。

同じ洗剤で洗濯しているはずなのに、このハンカチからは洗剤とは違ったどこか甘い匂いがする。

これぞまさに美形マジック。

どうしたらこんな良い匂いが香るようになるんだろう？

――絶対に明ちゃんのストーカーだと思っただけだな……

あまりの驚きの連発で混乱しちよつとぼんやりとしている頭で思い出す。

そもそもこのストーカー騒動の発端は、一週間ほど前の明ちゃんの一言から始まったのだと――

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「ねえ、透ちゃん。私ね、最近誰かにずっと見られてるような感じがするの。変だよね〜」

仕事が終わリ二人で住んでいるマンションに帰つてきて、遅めの夕飯を食べている時。

「今日はいい天気だね」くらいの何でもない調子で明ちゃんは爆弾発言を投下してくれた。

それも超一級の危険レベルのものを。

「えっ！？えっ！？」

「それにね、外にいる時にね、時々気配がするから後ろを見たりすると全身黒ずくめの大きな人がいたりするの。でもね、私と目線が合うとサツッて隠れちゃうの。あ、目線が合つて言ってもそのひとサングラスかけてるから本当に目線が合ってるのかは分らないけどね」

オイオイオイ！！

そんなニコニコとしながら話す内容じゃないよコレ！！
だって、それってどう考えたって――

「明ちゃんっ！それはストーカーってやつだよ絶対に！！！」

「ほえ？そっなの？」

「ほえ？」って首を傾げながら言うなんて反則くらい可愛すぎるでしょ明ちゃん！！もうお姉ちゃんの心臓はあなたの可愛さに撃ち抜かれてきゅんきゅんですよきゅんきゅん！！あー苦しい！！明ちゃんの可愛さにジャックされたあたしの心臓は呼吸がままならず苦しいであります！！こんな可愛い子があたしの妹だなんて神様本当にありがとう！！美形万歳！！明ちゃん万歳！！

「おーい、透ちゃん？大丈夫？」

「ばんざーい！！——って、ハッ！？あ、ご、ごめん明ちゃん！！！」

「明ちゃんて時々意識がどっかに飛んでっちゃうよね」

クスクスと笑う明ちゃんも可愛いですッ！――

――っていかんいかん！！こんなことしてたら話が先に進まない！！
明ちゃんが可愛いのはもう「地球は青い」レベルに明白なことであるからひとまず置いておくとして、問題はそう、明ちゃんがストーカー被害にあってるかもしれないってことだよ！！

「明ちゃん！笑ってる場合じゃないよ！ストーカーなら撃退しなくちゃっ！」

実は明ちゃんがストーカー被害にあうのは初めてじゃない。

そりゃそうだ、こんなに可愛いんだもん！

まあ、その度にあたしがこっそり撃退してきたから問題ないんだけどね！！（↑誇らしげ）

「でも、本当にストーカーなら危ないよ。透ちゃんにそんなことさせられないよ」

うるうると潤んだ大きな瞳で心配そうにあたしを見つめる明ちゃんは超・絶・K A・W A・I・I！！！！

何度も言うけど、ほんとあたしの妹に生まれてきてくれてありがとうー！！

ああ、ヤバい鼻血出ちゃうかも…

「大丈夫！大丈夫！いままでだつて、あだじが撃退しできたんだがらッー！！」

「透ちゃん、何で急に鼻押えてるの？」

「これはちよつどじだ諸事情と言いますが何で言つが………気にしないで」

とにかく、明ちゃんは今までの会話からも分かるように、ちよつと

ぬけてるといふか天然さんなところがあるから、姉であるあたしがしっかりと守ってあげないと！！

幸い、あたしたちが住んでいるこのマンションは明ちゃんの事務所である『GLORIOUS』が用意してくれた『GLORIOUS』に所属する芸能人専用のマンションだから、セキュリティは万全だ。オートロックだし、監視カメラ完備だし、正面口・裏口・非常出口にいたるすべての出入り口に選りすぐりのガードマンが常時駐在しているという徹底ぶりだ。

基本的に住んでいる人と事務所から立ち入りを許された人しか入れない。

こんな高級なマンション、明ちゃんが芸能人じゃなかったらあたしなんかには一生縁がない代物だ。

——そうなるとマンションの中は安心だから、気をつけるのは外ね。特に気が緩みがちなマンション周辺は気をつけないと！

グツと拳を握りしめ、決意を固くしたあたしはそのストーカーと出会ったのが本日。

仕事から帰宅する際に乗ったタクシーから降りた時、あたしは見てしまった。

電柱の陰に隠れて（デカいせいで隠れきれてなかったけど）こっちを見ている黒ずくめの人物を。

「ああー！！ストーカーッ！！」

思わず大声でそう叫ぶと、脱兎のごとく黒ずくめの人物は走り去ってしまった。

しかし、ここで諦めるあたしではない！！

可愛い可愛い妹の危険分子となるかもしれない存在をみすみす逃してたまるかっ！！

「待ちなさーいつ！！」

「透ちゃん！？」

可愛い妹が呼んでいる声がするが、今は戻るわけにはいかない！！

「ごめんね、明ちゃん！」

これはあなたのためでもあるのよッ！！

「待ちなさいったらコノヤローッ！！」

デカイ図体のわりにひょいひょいと身軽に逃げていく黒い後ろ姿を追いかけること数十分、ついにあたしはその大きな背中を捕まえた。持久力と足の速さには少しばかり自信があるものでね！
そんじよそこらのストーカーには負けないぜ！

「さーあ、捕まえたわよーっ！可愛い可愛い明ちゃんにひつつく害虫めっ！！その顔を見せなさいッ！！」

そう言いながらストーカーの顔を隠していたサングラスとマスクを

引っぺがすと――

そこには汗を滴らせ荒い息をしているという、妙にエロい雰囲気をもった美青年が現れました

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

そんなこんなでぼうっと回想をしていたあたしが、ハッと我に返るといつの間にか明ちゃんとストーリーカーな美青年——えっと、聖くん、だっけ？——はあたしから少し離れた場所で二人で何やら話し込んでいて邪魔できる雰囲気ではなかった。何となく手持無沙汰になって、何気なく鼻を触つてみると、鼻血が止まっていることに気付く。

おぼろげな意識の片隅に明ちゃんが拭き取ってくれたような記憶がある。

ああ、後でお礼言わないと…！

——てか、美青年の前で鼻血ブーしちゃったよ…！終った…あたしの女としての何かが終わった…！

今まで色んな事がありすぎて混乱してた頭が徐々に落ち着いてきたことで、色々と思い出し落ち込む。

そう言えば、顔が分らなかったとは言え、あんな美青年に向かって「害虫」とか言っちゃったよ…！

あ、でもストーリーカーなんて行為してるんだからそれくらい言われて

も仕方ないよね…？

…… ああー、でもでも！

美形に「害虫」とか言うのは美形好きのあたしの心が許さないって言うか、何だか居た堪れない気持ちになっってくるうー！

しばらくそうして悶々としていたけど、視界の端に再び二人の姿が見えた時ハッと気付く。

聖くんが明ちゃんに向ける目が笑顔が。

とてもとても優しく温かくて。

そう、そうそれはまるで愛しい人に向けるようなものだったことに。

—— やっぱり、聖くんは明ちゃんのことを好き…？

もしかして、聖くんは明ちゃんが好きで好きで思わずストーカーしちゃって、でもあたしに見つかって捕まえられたからとつさに私のストーカーだって言っちゃった、のかな？

誰だってストーカーされるのは良い気分になるもんじゃない。

だから本当は明ちゃんのことストーカーしてたんだけど、それを本

人（好きな人）にバレるのは最も避けたいことのはずだ。

けどストーカーしてたことはバレてしまったから、せめて違う人のストーカーだったということにしとけばちょっとはダメージが和らぐって考えたのかな？

苦しすぎる言い訳だけど……追いつめられたあの状況だったら有り得なくもない話なのかもしれない。

そう考えれば、聖くんの明ちゃんに向ける目や笑顔のことも納得できる！

——そつかそつか。見たところまだ十代っぽいし、若気の至りってヤツかね？

ストーカーという行為をしてしまったことはダメだと思うけど。

その根底にある好きって気持ちは否定したくはない。

だって、ストーカーって行為にまで走ってしまうほどその好きって気持ちはきつと深いものだったんでしょ？

——だって見極めてやろうじゃない！聖くんの気持ちは本物

なのか！明ちゃんに釣り合う相手なのかどうか！

さっきの様子からして、聖くんもストーカー行為をしてしまったことは本当に反省してるみたいだった。

二人で話している様子からしても、明ちゃんも聖くんのことを怒ったり嫌ったりはしていないようだ。

ということは、聖くんの恋が全うに実る可能性もあるというわけで。

最終的に決めるのは明ちゃん自身だけだ。

その前に姉であるあたしが見極めてやろうじゃない！

あのストーカー美青年が改心して明ちゃんに相応しい相手になるかどうか！

—— よーし、厳しく見定めるから覚悟しなさいよ、ストーカー美青年！！

熱く決意した眼差しで見つめた先の美青年は、あたしの視線に気がつくともたあの極上な微笑みを浮かべた。

……………いづになっただらあだじはこの顔を見て鼻血を出さなくなるの
でしょっ？

何だかんだで辿り着いた透の見解（後書き）

遅くなって申し訳ありません（――；）

何だか無理やりな話の展開ですかね；
大目に見てもらえると嬉しいです……

次回は透が一人で意識を飛ばしていた時の、明と聖の話を書きたい
と思います。

そこで二人の本性が分かる……かも？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119i/>

あたしのストーカーは極上の美青年！？

2011年5月6日20時10分発行